

教育史学会 第63回大会 参加のご案内

会員各位

教育史学会第63回大会を静岡大学にて開催いたします。

会場は、静岡キャンパス共通教育棟です。別掲の案内図をご参照下さい。

ご参加を心よりお待ちしております。

1. 日程 2019年9月28日(土)・29日(日)

2. 会場 静岡大学 静岡キャンパス

3. 大会参加費・懇親会費

	一般会員・臨時会員	学生会員	臨時学生会員
大会参加費	3,000円	無料	1,000円
懇親会費	4,000円	2,000円	2,000円

※一般会員以外が参加する際は、臨時会員とし、一般会員と同額の参加費となります。

※学生会員の大会参加費は無料とします。

会員でない学生が参加する場合は、臨時学生会員とし、特別料金とします。

※学部・大学院に在学する会員は、受付で学生証をご提示ください。

4. 受付

(1) 大会参加受付：受付にて参加費をお支払いください。『発表要綱集録』・名札などをお渡しします。

(2) 懇親会受付：参加受付と同時にお申し込みください（後でお申し込みいただくことも可能です）。

(3) 学会費納入：学会事務局受付でお申し付けください。

5. 研究発表・コロキウム

(1) 研究発表について

① 発表時間は30分（発表25分、質疑応答5分）です。

② 発表内容は未発表の研究に限ります。

③ 指定された分科会の開始時刻（9:00または9:30/14:30）までにご参集ください。遅刻した場合、本大会での発表資格を失います。当該分科会の発表順序は変更しません。発表予定者が欠席した場合も同様です。

④ 配付資料は、発表予定者のご判断によりご用意ください。大会準備委員会では、印刷・増刷のご希望には応じられません。

(2) コロキウムについて

① コロキウム企画の進行については、企画者にお任せいたします。

② 配付資料は、企画者のご判断によりご用意ください。大会準備委員会では、印刷・増刷のご希望には応じられません。

6. 総会・研究奨励賞授与式

9月28日(土) 13:00より開始します。会員の方はご出席をお願いいたします。

7. シンポジウム 共通教育B棟301番教室

9月29日(日) 12:30より開催いたします。

テーマは「スポーツと人間形成－教育とスポーツの関係史を問い直す－」です。

8. 懇親会について

9月28日(土)の研究発表終了後、学内の生協第一食堂にて懇親会を開催します。

9. 昼食について

9月28日(土)、29日(日)ともに、大学内の生協食堂および売店は営業していません。会場近辺には、徒歩5分程のところコンビニエンスストアがございますが、飲食店はほとんどありませんので、ご注意ください。

10. 宿泊について

大会準備委員会では宿泊施設の紹介や斡旋は行いません。

11. 託児サービス

本大会では実施いたしません。

12. 書籍販売

プログラムの刊行に際し、ご協賛いただいた出版社等による書籍の販売がございます。積極的なご利用をお願いいたします。

13. 問い合わせ先

教育史学会 第63回大会準備委員会 事務局
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷 836
静岡大学教育学部 菅野文彦研究室気付
E-mail info@jshse63.jp
ウェブサイト <http://www.jshse63.jp>

第63回大会準備委員会

委員長：菅野 文彦 事務局長：藤井 基貴
委員：江頭 智宏、松尾 由希子、吉川 卓治

タイムテーブル

9月28日(土)		9月29日(日)	
8:15	受付 共通教育 A 棟 2 階ホール	8:15	受付 共通教育 A 棟 2 階ホール
9:00	研究発表 共通教育 A 棟 2 階・3 階 A201・A202・A301・A302	9:00	研究発表 共通教育 A 棟 2 階・3 階 A201・A202・A301・A302
12:00	休憩	11:30	休憩
13:00	総会・研究奨励賞授与式 共通教育 B 棟 3 階 B301	12:30	シンポジウム 共通教育 B 棟 3 階 B301
14:00	休憩	16:00	
14:30	研究発表 共通教育 A 棟 2 階・3 階 A201・A202・A301・A302	16:00	コロキウム 共通教育 A 棟 2 階・3 階 A201・A202・A203・A301・ A302・A304
17:30	休憩	18:00	
17:45	懇親会 共通教育 B 棟 1 階 生協第一食堂		
19:45			

理事会を9月27日(金) 13:00より共通教育A棟303で開催します。

紀要編集委員会・書評委員会を、理事会終了後に共通教育A棟303で開催します。

9月28日(土)午前 研究発表

第1分科会 会場：共通教育A棟 201番教室

司会：荒井 明夫（大東文化大学）・川村 肇（獨協大学）

- [1] 9:00 幕末期藩儒の講義における経典解釈
—吉村秋陽・斐山に焦点を当てて—
井上 快（広島大学・院）
- [2] 9:30 地方における学制の解釈と運用
湯川 文彦（お茶の水女子大学）
- [3] 10:00 開拓使の学校・教育所経費補助策
井上 高聡（北海道大学大学文書館）
- [4] 10:30 明治前期の徴兵と私学の生徒募集
—慶應義塾を例として—
奥野 武志（早稲田大学）
- [5] 11:00 千島アイヌの教育史 その1
—色丹島への強制移住（1884年）を中心に—
小川 正人（北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）
- <総合討論>11:30-12:00

第2分科会 会場：共通教育A棟 202番教室

司会：柏木 敦（大阪市立大学）・杉浦 由香里（滋賀県立大学）

- [6] 9:30 明治・大正期の実業補習学校と青年夜学会の展開
堀 雄高（京都大学・院）
- [7] 10:00 大正期信州の社会と教育が、昭和戦後期関西の同和・解放教育に影響を与えた可能性
—中村拡三（なかむら・こうぞう、1923～2002）をキーパーソンとして考える—
岡本 洋之（兵庫大学）
- [8] 10:30 戦前昭和期徳島県松茂村における村政改革と教育の整備
—実業補習学校の充実と「全村教育」への志向—
三羽 光彦（芦屋大学）
- <総合討論>11:00-11:30

9月28日(土)午前 研究発表

第3分科会 会場：共通教育A棟 301番教室

司会：前田 一男（立教大学）・大矢 一人（藤女子大学）

- [9] 9:00 戦後北海道における「引揚児童」と学校
坂本 紀子（北海道教育大学）
- [10] 9:30 戦後の長欠不就学児への学校福祉実践の意義に関する研究
—長欠児童生徒援護会の設立理念と実践を通して—
大崎 広行（武蔵野大学）
- [11] 10:00 戦後教育改革期の指導要録における「教育評価」的機能の検討
—「累加記録摘要」（1949）を中心に—
松本 和寿（筑紫女学園大学）
- [12] 10:30 1950年代初頭の漁村にみる標準語教育の模索
—千葉県安房郡富崎小学校の実践と東京大学大田堯研究室のかかわりを軸に—
鳥居 和代（金沢大学）
- <総合討論>11:00-11:30

第4分科会 会場：共通教育A棟 302番教室

司会：香川 せつ子（西九州大学・客）・宮本 健市郎（関西学院大学）

- [13] 9:00 18世紀末アメリカの学校教師と子どものモラル
—日曜学校教師ジョン・エリーの子ども観と教育実践を通して—
乙須 翼（長崎国際大学）
- [14] 9:30 アイルランド国民学校制度の宗派化に関する一側面
—私設公営学校(non-vested school)の導入と展開—
岩下 誠（青山学院大学）
- [15] 10:00 「人種の質的向上」をめぐる知の交換と子ども
—第一回国際優生学会議（1912）を手がかりに—
草野 舞（九州大学・院）
- [16] 10:30 ウィネトカ教職大学院の成立過程
—教師による現職教育の組織化—
宮野 尚（東京学芸大学・非）
- [17] 11:00 ロシア教育史における「フルシチョフ期」の見直し
所 伸一（札幌保健医療大学）
- <総合討論>11:30-12:00

9月28日(土)午後 研究発表

第5分科会 会場：共通教育A棟 201番教室

司会：清水 康幸（青山学院女子短期大学）・江口 潔（九州大学）

- [18] 14:30 1929年の専検答案紛失事件
三上 敦史（北海道教育大学）
- [19] 15:00 1930-40年代の公立幼稚園『保育日誌』にみる教育方法の変遷
—神奈川県中郡大磯町立大磯幼稚園を事例として—
上田 誠二（横浜高等教育専門学校）
- [20] 15:30 第二次世界大戦前の行事教育論における集団性の検討
—1930年代から1940年代前半までの『福岡県教育』掲載記事を通して—
余公 裕次（西日本短期大学）
- [21] 16:00 北海道における「新興報徳運動」と報徳教育
—地方官僚遠山信一郎のもたらした展開に着目して—
須田 将司（東洋大学）
- [22] 16:30 国民学校期放送教育における聴取指導
邊見 信（十文字学園女子大学）

<総合討論>17:00-17:30

第6分科会 会場：共通教育A棟 202番教室

司会：谷本 宗生（大東文化大学）・和崎 光太郎（浜松学院大学短期大学部）

- [23] 14:30 大正期における小学校教師の「修養」
—神奈川県久良岐郡六浦荘村・長島重三郎の実践を手がかりに—
真辺 駿（東京学芸大学・院）
- [24] 15:00 大正期の仏教系私学の大学「昇格」に関する一考察
—大学教育と僧侶養成をめぐって—
雨宮 和輝（早稲田大学・院）
- [25] 15:30 名古屋大学教育学部ならびに大阪大学人間科学部とその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソポグラフィ的研究
鈴木 篤（大分大学）
- [26] 16:00 戦後教育改革期において教育実習は被教師教育者にどうみられていたのか
—文理科大学生の実習記録（1947年）を手掛かりに—
久恒 拓也（新見公立大学）

<総合討論>16:30-17:00

9月28日(土)午後 研究発表

第7分科会 会場：共通教育A棟 301番教室

- 司会：一見 真理子（国立教育政策研究所）・山本 一生（上田女子短期大学）
- [27] 14:30 東部内モンゴル地域におけるモンゴル人女子教育の「萌芽」
—毓正女学堂（1903-1909）の位置付けについて—
劉 迎春
- [28] 15:00 下田歌子と清末中国の女子教育
—『新選家政学』（1900年）に着目して—
董 秋艶（福岡県立大学）
- [29] 15:30 胡適と科学的方法 —哲学方法論史からみた思想史的系譜—
山下 大喜（名古屋大学・院）
- [30] 16:00 中華民国北京政府期における全国教育会連合会の教育部上申決議
今井 航（別府大学）
- [31] 16:30 青島における中国人日本語教員の養成 —第2次日本占領期を中心に—
魏 吉菲（お茶の水女子大学）
- <総合討論>17:00-17:30

第8分科会 会場：共通教育A棟 302番教室

- 司会：荻路 貫司（福島大学・名）・江頭 智宏（名古屋大学）
- [32] 14:30 アントニオ・デ・ネブリハ『子供の教育について』の修辞法
—初期近代スペインにおける教育言説の一様式—
井上 滉人（北海道大学・院）
- [33] 15:00 18世紀フランスにおける公教育論の背景と展開
—シャルル・ロラン（1661-1741）を中心に—
越水 雄二（同志社大学）
- [34] 15:30 教育手法としてのおとぎ話
—18世紀の教育作家ルプランス・ド・ポーモン夫人—
田中 理紗（東北大学・院）
- [35] 16:00 「国家」の「教育」から「教育」の「国家」へ
—ヘーゲル「法哲学」における「教育」の再読—
山内 芳文（東日本国際大学／筑波大学・名）
- [36] 16:30 ヴァイマル共和国における1926年青少年俗悪図書保護法の成立とその教育史的意義
松井 健人（東京大学・院／日本学術振興会特別研究員）
- <総合討論>17:00-17:30

9月29日(日)午前 研究発表

第9分科会 会場：共通教育A棟 201番教室

司会：小野 雅章（日本大学）・高橋 陽一（武蔵野美術大学）

- [37] 9:00 明治期再興後の咸宜園
鈴木 理恵（広島大学）
- [38] 9:30 「文検漢文科」の研究
—明治期を中心に—
宮本 雅也（二松学舎大学・院）
- [39] 10:00 1890年代の尋常師範学校制度改革の動向と師範教育の実際
—地方部尋常師範学校長会議の検討を中心に—
湯川 嘉津美（上智大学）
- [40] 10:30 学校教育における「校訓」「教育勅語」「戊申詔書」の位置づけ
—明治40年代を中心に—
岩木 勇作（創価大学）

<総合討論>11:00-11:30

第10分科会 会場：共通教育A棟 202番教室

司会：白石 崇人（広島文教大学）・足立 淳（朝日大学）

- [41] 9:00 峰地光重「遊戯の学習化」批判の論理
—大正新教育における「生命」に関する一考察—
後藤 篤（奈良教育大学）
- [42] 9:30 近代日本におけるペスタロッチ教育学説の変遷とその影響
—身体教育の概念に注目して—
中野 浩一（日本大学）
- [43] 10:00 村岡範為のドイツ滞在と戦前の学校儀礼・唱歌について
小林 亜未（ランダウ大学）
- [44] 10:30 昭和初期におけるアメリカ・プロテスタントの滞日教育調査
—日曜学校を中心に—
谷川 穰（京都大学）

<総合討論>11:00-11:30

9月29日(日)午前 研究発表

第11分科会 会場：共通教育A棟 301番教室

司会：大橋 基博（名古屋造形大学）・丸山 剛史（宇都宮大学）

- [45] 9:00 文部省編『新教育指針 第一部』（1946年）の成立過程とその理念
—戦前・戦後における石山脩平の思想と行動に注目して—
青柳 翔也（筑波大学・院）
- [46] 9:30 日本教職員組合の平和運動と朝鮮戦争
布村 育子（埼玉学園大学）
- [47] 10:00 勤評「神奈川方式」成立における県教育委員会の話し合い路線
米田 俊彦（お茶の水女子大学）
- [48] 10:30 船乗り育成から探求活動へ
—昭和と平成の高校水産教育を担った代表的教師の実像—
中野 浩（東京海洋大学・非）

<総合討論>11:00-11:30

第12分科会 会場：共通教育A棟 302番教室

司会：山本 和行（天理大学）・山下 達也（明治大学）

- [49] 9:00 大韓帝国期「国語読本」教科書の特性
—学部編纂「普通学校学徒用国語読本」と大韓国民教育会編纂「初等小学」を中心に—
野村 淳一（千葉大学・院）
- [50] 9:30 朝鮮人女学生と改名
—1940～1945年の東萊高等女学校を中心として—
國分 麻里（筑波大学）
- [51] 10:00 戦後台湾高校の国防教育と愛国心教育
山田 美香（名古屋市立大学）
- [52] 10:30 日中友好の先駆的実践
二見 剛史

<総合討論>11:00-11:30

シンポジウム

9月29日（日）12:30～15:50 会場：共通教育B棟301番教室

スポーツと人間形成—教育とスポーツの関係史を問い直す—

〔報告者〕 佐々木浩雄（龍谷大学）
中澤篤史（早稲田大学）
來田享子（中京大学）

〔指定討論者〕 鈴木明哲（東京学芸大学）
白水浩信（北海道大学）

〔司会〕 藤井基貴（静岡大学）
吉川卓治（名古屋大学）

趣旨

スポーツの歴史は教育の歴史においても重要な一環をなしている。現代オリンピック復興の立役者であるクーベルタンは「スポーツの力を取り込んだ教育改革を地球上で展開し、これによって世界平和に貢献する」という理念を掲げ、オリンピックは「スポーツの祭典」であると同時に「平和の祭典」であると宣言して、そのための教育改革にも力を注いだ。

しかしながら、スポーツと教育の関係史はさまざまな困難や矛盾の歴史でもあった。近代国家の成立にともなって、スポーツは権力構造のなかで国家化・近代化の道具として巧みに利用されてきたことは周知の事実である。また、現代においてはスポーツにおける商業主義の拡大がスポーツの持つ文化的価値を毀損し続けているという指摘もなされている。さらに、勝利至上主義の行き過ぎによって、昨今のスポーツ界ではドーピングやハラスメントによる不祥事やスキャンダルが深刻な陰をおとしている。スポーツや学校体育への社会的関心が高まるなかにあって、本シンポジウムでは教育史とスポーツ史の専門家の対話を通して、教育とスポーツの関係史を問いなおすことを目指す。

報告者には日本体育学会副会長及び体育史学会理事である來田享子氏、2016年に『体操の日本近代：戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』を上梓した佐々木浩雄氏、2014年に『運動部活動の戦後と現在』を発表して、部活動問題に一石を投じた中澤篤史氏に登壇いただき、指定討論を教育史学会の会員である鈴木明哲会員及び白水浩信会員が行う。司会進行は藤井基貴会員及び吉川卓治会員がつとめる。

シンポジウムの企画にあたり、スポーツ史分野の研究者を紹介くださった來田氏は「スポーツ組織の権力のダイナミクス、ジェンダーなどの観点から国内外の史料を分析し、国際的な動向が日本に与えた影響」について研究されており、当該分野の第一人者として国際機関における「性別確認検査」の歴史的起点を中心にご報告をいただく。佐々木氏には近代日本における国民統合や国家による体力管理と体育・スポーツのあり方がどのように相互作用をもったかについてご報告いただく。中澤氏には運動部活動や学校体育を中心に、スポーツが日本の学校教育と結び付いてきた歴史的背景についてご報告をいただく。鈴木会員及び白水会員からはスポーツ史における研究成果を受けて、教育史・思想史の視点を交えた論点提示を行っていただき、フロアーへの問題提起とする。報告及び討議の内容は教育史・スポーツ史にとどまらず、政治史、外交史、社会史とも接続するものである。

《報告者プロフィール》

佐々木 浩雄（ささき ひろお） 龍谷大学文学部・准教授

研究領域：体育史、スポーツ史

主要業績：『体操の日本近代：戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』青弓社、2016年。

「体操とナショナリズム：体操の国民的普及と国家政策化」石坂友司・小澤考人編『オリンピックが生み出す愛国心：スポーツ・ナショナリズムへの視点』かもがわ出版、2015年、116-147頁。

中澤 篤史（なかざわ あつし） 早稲田大学スポーツ科学学術院・准教授

研究領域：スポーツ社会学、身体教育学

主要業績：『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』青弓社、2014年。『そろそろ、部活のこれからを話ませんか 未来のための部活講義』大月書店、2017年。

來田 享子（らいた きょうこ） 中京大学スポーツ科学部・教授

研究領域：体育・スポーツ史、スポーツとジェンダー

主要業績：「1920-30年代の国際女子スポーツ連盟による女性スポーツの国際化と組織化」掛水通子監修、山田理恵・及川佑介・藤坂由美子編著『身体文化論を繋ぐ』叢文社、2019年、117-137頁。『よくわかるスポーツとジェンダー』共編著、ミネルヴァ書房、2018年。『知の饗宴としてのオリンピック』共編著、エイデル研究所、2016年。

《指定討論者プロフィール》

白水 浩信（しろうず ひろのぶ）北海道大学大学院教育学研究院・准教授

研究領域：西洋教育史

主要業績：『ポリスとしての教育—教育的統治のアルケオロジ—』東京大学出版会、2004年。

「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」日本教育学会『教育学研究』第78巻第2号、2011年6月、50-60頁。「教育言説揺籃期の *éducation* なき教育論—ジャック・アミヨとプルタルコス『子どもの教育について』」『思想』（岩波書店）、第1126号、2018年2月、31-43頁。

鈴木 明哲（すずき あきさと）東京学芸大学健康・スポーツ系教育講座・教授

研究領域：体育科教育実践史

主要業績：『大正自由教育における体育に関する歴史的研究』風間書房、2007年。

「奈良女子高等師範学校附属国民学校における体錬科実践—躰訓練をめぐる問題—」『日本の教育史学』第53集、2010年、43-55頁。「1930年前後奈良女子高等師範学校附属小学校における体操科教育の展開—内容領域の統合をめぐる問題を中心に—」『日本の教育史学』第43集、2000年、42-59頁。

コロキウム 1

9月29日(日) 16:00~18:00 会場：共通教育 A 棟 201 番教室

教育勅語を伝える

オルガナイザー：小野雅章（日本大学）

高橋陽一（武蔵野美術大学）

報告者：米田俊彦（お茶の水女子大学）

小野雅章（日本大学）

樋浦郷子（国立歴史民俗博物館）

須田正晴（太郎次郎社エディタス）（非会員）

伊東 毅（武蔵野美術大学）（非会員）

高橋陽一（武蔵野美術大学）

教育勅語を「伝える」ことを中心とする趣旨

教育勅語は多くの教育史学研究者の共通の研究対象であるとともに、大学・教員養成における教育学・教育史学・道徳教育の題材であり、さらに初等中等教育における社会科・歴史教育などの題材でもあります。教育史学会は、多くの会員が教育勅語について研究と教育をおこなっており、この成果を踏まえて2017年には理事会声明、シンポジウム開催、岩波ブックレット『教育勅語の何が問題か』の刊行がありました。その後2017-2019年には、日本教育学会など関連学会の活動や、学会内外の研究成果の発表なども相次いでいます。こうした近年の状況を踏まえて、それぞれの教育や研究を通じて、教育勅語を「伝える」ことに焦点をあてて、語りあう場を持ちたいと思います。

企画（司会）：小野雅章（日本大学）、高橋陽一（武蔵野美術大学）

主要報告（一人10分、全体時間は討議をふくめて120分）

コロキウムですので、下記のタイトルは今後の調整で変更になることがあります。

- ①米田俊彦（お茶の水女子大学）「教育史学会の声明・ブックレット、教育関連学会声明および日本教育学会WG報告書にかかわって」
- ②小野雅章（日本大学）「教育史学会と日本教育学会の声明にかかわって」
- ③樋浦郷子（国立歴史民俗博物館）「教育勅語の展示をめぐって」
- ④須田正晴（太郎次郎社エディタス）「『くわしすぎる教育勅語』を企画編集して」
- ⑤伊東毅（武蔵野美術大学）「特別の教科である道徳と教育勅語」
- ⑥高橋陽一（武蔵野美術大学）「討議のまとめと、これからの「伝えること」」

なお、現在予定している教育史学会2020年第64回大会の武蔵野美術大学開催の準備として、武蔵野美術大学の非会員の実行委員予定者である伊東毅、白石美雪、小澤智子が非会員の協力者として出席します。運営にあっては、高橋陽一の受けた科学研究費補助金「教育勅語の本文とモノの系統的研究」で行います。

コロキウム 2

9月29日(日) 16:00~18:00 会場：共通教育 A 棟 202 番教室

新教育運動における「国際化」の進展と「郷土」形成論

オルガナイザー：渡邊隆信 (神戸大学)

報告者：宮本健市郎 (関西学院大学)

山崎洋子 (福山平成大学)

山名 淳 (東京大学)

渡邊隆信 (神戸大学)

<趣旨>

19世紀末から20世紀初頭にかけて先進諸国で展開した新教育運動を振り返るとき、1920年代から30年代は、教育の「国際化」という点に、大きな特色を見いだすことができる。その象徴が1921年に設立された「新教育連盟」である。同連盟は世界で最初の本格的な教育の国際ネットワーク組織であった。同連盟の機関誌や国際会議を通じて、各国の新教育の理論と実践が発信され、相互理解が促された。背景には第一次世界大戦後の政治的、社会的、文化的次元での国際協調の流れがあった。

一方で、1920年代から30年代は、「郷土 (Heimat, country, home)」が新教育のキーワードとして脚光を浴びた時代でもある。生活と学習の結合を重視する新教育にとって、「郷土」は格好の教育の場と内容を提供した。「郷土科」をはじめ、「郷土」を主題とした学習活動が各国で多様な展開を見せた。また、学校内外での「郷土」学習を通して、「郷土」への理解と愛着を涵養することが目指された。

従来の新教育研究では、「国際化」と「郷土」が別個の問題として論じられ、相互の関係が問われることはなかった。一見相反するベクトルにある「国際化」と「郷土」は、各国の新教育の理論と実践において、どのような関係を示したのか。

本コロキウムでは、1920年代から30年代を中心に、新教育運動における「国際化」の進展と「郷土」形成論との関係の諸相を、アメリカ(宮本)、イギリス(山崎)、日本(山名)、ドイツ(渡邊)の具体的な事例に即して比較史的に検討したい。

コロキウム 3

9月29日(日) 16:00~18:00 会場：共通教育 A 棟 203 番教室

戦後の教員社会はいかに再編されたか

－教育情報回路としての教育会の総合的研究 第15回－

オルガナイザー：梶山雅史（岐阜女子大学）

須田将司（東洋大学）

報告者：板橋孝幸（奈良教育大学）

須田将司（東洋大学）

佐藤高樹（帝京大学）

2005～2018年まで連続して企画してきた本研究会の第15回目のコロキウムとなる。目下、第三論文集の刊行や科学研究費（基盤B）「近現代日本の地方教育行政と「教員育成コミュニティ」の特質に関する総合的研究」（2018～2020）の採択のなかで、戦前・戦後の教員社会の再編に重心を移しつつ、さらなる追究を進めている。これに関連して本企画では、2014～2016年度に行われた戦後秋田県の共同研究（科研費（挑戦的萌芽）「学力向上を支える教員文化の創造に関する基礎的研究」）で明らかとなった秋田県教育会の終焉、教育委員会、校長会、教頭会、教育研究所、教育研究会、退職校長会の活動実態を検討対象として、戦後の教員社会の再編を解き明かすにはいかなる着眼点・研究視角と資料を用いるべきか、吟味検討する場を設けようとするものである。

板橋報告「秋田県校長会・退職校長会・郡市校長会の教育研究活動」

「学力向上を支える教員文化の創造に関する基礎的研究」では、学力向上の背景としてさまざまな要因が考えられる中、その一つとして教師の力量形成を組織的かつ継続的に促していく地域の教育研究組織に注目し、その歴史的形成過程を分析して地域の教育文化を下支えしていることを明らかにする目的で研究を進めてきた。本発表では、地域の教員文化を下支えしている事例として秋田県の校長会を取り上げて検討する。

須田報告「秋田県教育委員会・県市町村教育研究所・（官製）教育研究会の教育研究活動」

特に教育行政側の施策に焦点を当てる。秋田県教育委員会は『教育秋田』を発行し、1960年代には3教育事務所でも年報・月報が発行された。秋田県教育研究所は1956年に東北6県では最も遅く、全国でも40番目に設けられた。教育研究会は戦後6・3制発足直後から群生した各校種・教科ごと団体を母体に、1960年代には各郡市教育研究会が発足した。これらの活動や役割について紹介・検討する。

佐藤報告「戦後秋田県における教員団体の組織化と学力問題—教職員組合の活動に着目して—」

本報告では、戦後県内教育研究活動の下地を形成した教職員組合（秋教組）の活動に焦点を当て、「教育会」後の教員の組織化をめぐる動向を考察する。北方教育など戦前教育実践の遺産継承を意識する一方、戦後改めて露呈した学力の「都鄙格差」といった問題に、秋田の教員社会はいかに対峙したのか。「国家による教育統制」という対立軸に解消しきれない学力問題（学テ）をめぐる中で、教組は教育団体としての意義をいかに自己規定していったのか、その動向を探ることとしたい。

コロキウム4

9月29日(日) 16:00~18:00 会場：共通教育A棟301番教室

ドイツ現代史と人間

オルガナイザー：遠藤 孝夫（岩手大学）

報告者：對馬 達雄（秋田大学・名）

岡 典子（筑波大学）

遠藤 孝夫（岩手大学）

趣旨

「人間いかに生きるか」という問いは、人間形成に関わる学問である教育学にとって最も根源的な課題である。教育の歴史的事象を分析する教育史研究においても、この問いと無関係であることはできないだろう。

こうした課題意識から、ドイツ現代史、とりわけナチズム体制の下での多様な人間の生き方やあり様、ナチズム体験後の生き様に焦点を当てた事例報告を通して、「人間いかに生きるか」を討議する機会とすることを目的に、コロキウムを企画した。また、本企画には、近年の教育史研究の衰退傾向とドイツ教育史研究を志す若手の減少傾向を踏まえて、人間形成をドイツの歴史的事象から研究しようとする研究者及び未来の研究者の「交流の場」を創りたいとの願いが込められている。

3名の報告者のテーマと論点は以下の通りである。

(1) 對馬報告

テーマ：一般読者に向けてドイツ現代史研究者が発信すること

論点：○ツンフト的研究社会から脱却する必要性・・・縮小・消滅の危惧

○今取り組んでいること・・・「ヒトラー最後の脱走兵」

研究成果が歴史政策を変えたという稀有の事態を伝えること

(2) 岡報告

テーマ：教育研究として見たナチ期のユダヤ人救援活動

論点：○「沈黙の勇者たち」

○救援活動の実態

○救援者の人間的連帯

(3) 遠藤報告

テーマ：ナチズム体制下を生きたヴァルドルフ学校の関係者

論点：○ナチ当局によるヴァルドルフ学校への弾圧

○ヴァルドルフ学校の関係者は如何に対応したか

○ドレスデン校の指導的教師エリザベート・クライン

コロキウム5

9月29日(日) 16:00~18:00 会場：共通教育 A 棟 302 番教室

教員養成に関する比較発達史研究の試み

オルガナイザー：尾上雅信（岡山大学）

報告者：尾上雅信（岡山大学）

高瀬 淳（岡山大学）

梶井一暁（岡山大学）

司 会：小林万里子（岡山大学）

趣旨

教員養成に関する営みは、各国で個別の発達を遂げ、同時に世界的動向のなかで影響関係を有している。報告者らは、主にフランス、イギリス、ドイツ、アメリカ、ロシア、中国、日本の動向に目を向け、各国が19-20世紀の国際関係のなかでどのような教員を求め、どう養成し、国民教育の現場たる学校に教員を送り出していたのか、比較発達史的な分析を試みる研究を進めている。比較発達史という歴史貫通的かつ比較横断的な観点から、各国が取り組んだ教員養成の実態と特質および影響関係を検討することをめざすものである。教員養成の過程と到達を歴史のなかで把握する作業は、各国で現在も進行する教員養成改革の歴史的前提と根拠を検証する作業として欠かせないはずである。

本報告では、上記の研究関心にもとづき、その一環として、フランス、ロシア、日本を取り上げ、事例研究を行う。その際、現段階では部分的な検討にとどまるが、ドイツ（プロイセン）からの各国への影響、すなわち教員養成（師範教育）におけるジャーマン・インパクトという視角に留意したい。

コロキウム 6

9月29日(日) 16:00~18:00 会場：共通教育 A 棟 304 番教室

社会科用副教材『世界の子ども』(平凡社、1955-57年)の検討

—子どもの作文から問う戦後東アジア—

オルガナイザー：須永 哲思 (京都外国語大学・非)
報告者：須永 哲思 (京都外国語大学・非)
永田 和寛 (愛知県立高等学校)
張 彩薇 (京都大学・院)
松下 佳弘 (世界人権問題研究センター登録研究員)
呉 永鎬 (世界人権問題研究センター専任研究員)

〈企画の趣旨〉

1955-57年にかけて、平凡社から『世界の子ども』(全15巻)という小中学生向けの社会科用副教材が刊行された。この副教材は、『綴方風土記』(全9巻、1952-55年)シリーズの続編にあたり、世界中から集めた子どもたちの作文と、それに編者らが付した解説文とで構成されている。編集スタッフには、国分一太郎・成田忠久という戦前から生活綴方運動を牽引した人物のほか、戦前のエスペラント運動の中心人物であった伊東三郎・栗栖継や秋田雨雀らも加わっていた。従来、『山びこ学校』や『綴方風土記』に比して注目されてこなかった『世界の子ども』だが、生活綴方運動の戦前と戦後、生活綴方とエスペラントの接点をなしており、世界史的な視角から生活綴方を考察する上でも重要な位置を占めている。

当時平凡社で企画編集長を務めた吉田九洲穂が遺した資料群(吉田文書)には、編集会議のノート・資料のほか、作文収集のためにエスペラントや各現地語でやり取りされた通信文、現地の言葉で書かれた作文や刊行時には掲載されなかった不採用作文など、多様な資料が含まれている。段ボール約27箱に及ぶ吉田文書を資料として用いることで、その企画の進展過程や編集部内部での議論を明らかにし、「生活綴方的教育方法」が世界に発信されたことの可能性やその同時代的な限界の所在について、具体的に考察することができる。

これまで、報告者5名を含めた14人ほどのメンバーで、吉田文書の整理や『世界の子ども』の検討を通じて、生活綴方を軸に戦後の東アジアにおける冷戦と植民地主義を問い直す共同研究を進めてきた(駒込武編『(仮)生活綴方で編む戦後世界—〈冷戦〉と〈越境〉の1950年代』岩波書店、2020年刊行予定)。

本報告では、共同研究の成果の一部として、まず、『世界の子ども』という出版企画が戦前・戦後のエスペラント運動・生活綴方運動とどのように関わりながら展開したのか、明らかにする。そして、『中国・朝鮮篇』(『世界の子ども』第3巻)について、台湾・朝鮮における作文の収集過程や内容の分析、および1950年代の朝鮮学校における「ウリマル」と生活綴方をめぐる展開との比較検討を通じて、『世界の子ども』の可能性と限界の所在について考察する。



平凡社児童部「世界の子ども」編集部『世界の子ども(国内ニュース)』No15、1956年5月(吉田文書)